



その人にしかできない仕事もあれば、
みんなでわかちあって成り立つ仕事もある。
そして、仕事ができるように、
まわりを整えていくこともあります。
聴覚障がい者の施設「遠州みみの里」では、
聞こえない環境で意思疎通をはかるためのさまざまな工夫が
なされています。手話で、光で、絵や写真で、身ぶり手ぶり。
あらゆるコトバを使ったシゴトバの「通じ合う努力」。
それはとても複雑で、あたたかい真剣さに満ちています。



「しのぶさん、アルス・ノヴァを語る」
 「自分がやりたいことができる場所」です。
 私は文章を書いたり絵を描いたりするんですけど、決められた作業じゃない、純粹に自分がやりたいことをできる場所って、他にないんです。スタッフも基本「ダメ」とは言わない。何かやりたいと相談すると「じゃあできるところまでやってみよう」。私が「本を書きたい」と言ったときもそう。否定しないんです。
 でも、いいことばかりじゃなくて、話聞いてほしいときに相手してくれなくて、落ち込んで帰ることもあるし、求めていたのと違う的外れな答えしか返ってこなくてがっかりすることもある。いつも優しいわけじゃない。それでも、優しくないことが今の自分には必要なのかもしれない、って考えるんです。
 書くことで自分を表現したい私には、ときどき優しくないけれど、でもここがイバシヨだと思っ。
 (関口しのぶ・談)

優しいばかり
 じゃない。
 でも、ここに居る。

アルス・ノヴァ
 やりたいことや社会参加、就労をサポートする障害福祉施設。「彼らにしかできない仕事、自己表現」をスタッフと一緒に探しています。



陶芸家のんさん 土にあそぶ

陶芸歴24年。「青葉の家」の、どのスタッフよりも長く陶芸に関わってきたのんさんは、いつも自分だけの場所で土に向かう。

施設長の犬塚さんが見守る中、ろくろの上で武骨な指を器用に使って湯のみを作ったり、上へ上へとどんどん土を伸ばして傘立てを作ったり。

天気や気温によって変わる土の柔らかさや手触り、匂い、味(ー)、五感をフル動員して確かめる。子どもが時間を忘れて遊びに没頭するように、のんさんは陶芸家の手つきで土に遊ぶ。

犬塚さんは、「土は希望」と言う。作品にも、のんさんの笑顔にも、希望が見える。



学校に行けなかったり
人となじめなかったり
いろんな思いを
抱えていた時間が、
ここが変わった。
「こころなさい」
「こころしくちや」
という縛りがない。



コーヒーを淹れる
楽しさを知った。



イラストを描いて
お店のマークや商品になった。
そして今は、イラスト全般を
担当している。



なにもかも、うまくいく
わけではないけれど
やわらかくサヤヤかぞ
「あたりまえの日常」が
自由で、心地いい。
ドリーム・フィールドは、
私のイバシヨです。

コーヒーを淹れる。

カフェと雑貨の店
「いもねこ」で
コーヒーを淹れる。



ドリーム
フィールド

みんなと過ごす。

みんなが
集まる場所で、
ゲームをする。
勉強を教える。





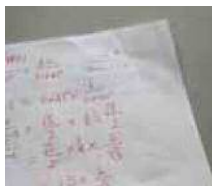
ほっとする
場所を見つけた。



日常が少し
好きになった。



やりたいことが
ここにある。



The road to DreamField

高校教師として働きのながら、大山浩司さんは考えた。はたして学校だけが「育ちの場」だろうか。学校という集団の枠になじめず悩む生徒は少なからずいる。枠に人を当てはめるのではなく、特徴をそのまま受け入れるイバシヨが必要なんじゃないだろうか。

さまざまな「出会い」を用意するが、それはきつかけに過ぎない。何を選択するか、何に目覚めるかは本人次第。不定期で音楽イベントを開催したり、カフェを運営したりする中で、外とつながり、認め合い、許し合う。

ここをイバシヨと呼ぶ多くの生徒たちが、時間をかけ、ときに立ち止まりながら、自分で道を見つけていく。





のづあ公民館の 未来を考えてみた。

《座談会》

M「いろいろなイベントやってみるよね、哲学カフェとか。私はダジャレと詩の講座をやってみます」

E「僕はアートと障がいについて表現できる場所を探していて、ここなら自分ですつとやってきた音楽で何かできるかな、と。でもそれだけに限らないですよね」

N「もつと漠然としますよね。僕はこれまでいろんな場所に馴染めなさを感じていたけど、ここの漠然とした感じ

が逆に心地いい」

K「障がいを持ってたり、何か生きにくさを感じている人って、引きこもってしまうことが多いんです。そういう人たちが外へ出るきっかけになる場所じゃないかなあ」

E「梓は用意するけれど、そこにどういいうイバシヨを求めろかは、人それぞれの感じ方次第という雰囲気だよな」

N「実際、障がいのあるなし関係なく、たくさん人が出入りしていて、僕も哲学カフェの『自

分語り』で、いつもは言えない経験や思いをしゃべって、いろんな決心がついた気がしました。生きにくくても、そのままでもいいんだ、と」

K「僕の場合はここで麻雀をやるんだけど、いろんな人と関わることで、障がいを持っていてもいなくても、それはその人の一側面として、共感できたり理解できたりするんです。ふらっと来て誰かとしゃべって、目的があつて何かやることもあれば、いつも誰かがいる場所、来てもいい場所、なのかも」

M「ルールみたいなものもないしね。将来的には、生きにくさを感じている人が、誰でも集える場所を目指しているのか



も。これからも、いろんな個性が同時進行して共存していくんだらうね」

E「音楽や本の話題を共有できて、ちよつと面白いことができる。そんな、日常だけど、非日常な場所になってくれればいいなと思います」

のづあ公民館
障がいや国籍、年齢などの「ちがい」を超え、みんなが集える公民館。休んだり、話したり、お茶したり、自由に過ごせます。ときには楽しい講座やイベントも開催。やりたいことの持ち込みもできる交流の場でもあります。





はじめは1つのテーブルだった。3年前、グレース工房のガレージの一角で販売を担当していたおいでくん。夏の暑い日も、冬の寒い日も、毎日ガタガタ震えながらテーブルを前に店番をする姿に、施設長が感銘を受けた。

「いつかゆうやの店、作ってやるから!」。その言葉から2年、2014年春、ようやくおいでくんの、おいでくんだけの店が完成した。

扱うのは、グレース工房特製の天然天日塩やインドスパイス、通所者の作る陶芸作品、東北支援の物産やボンセンベい、無農薬野菜などなど。お勤めは?と聞くと、その時々

おいでくんが「これ!」と思っ
たものを教えてくれる。

小さな小さな店の隅っこで、小さく固くなって店番をするおいでくん。必見はその「走り」だ。お金を渡すと猛ダッシュで事務所の会計さんのところに向かい、また猛ダッシュで戻ってきてお釣りをくれる。なぜか行きと帰りで別ルートを通ることもあるが、どちらから戻ってくるかはおいでくん次第。

おいでくんが走るの
は商品が売れたとき。走る姿を見
て、「おいでモール」に拡大し
ようともくるむ声があるとか
ないとか。



「あなたにとって、イバショとは？」という質問に
「自分のやりたいことができる場所」「ありのままがいい場所」
と答えた人が何人もいました。
目に見えないルールのようなものにとらわれて生きることが、
辛かったり難しかったりする場合、「いいと思うよ」
「ここにいてもいいよ」という
メッセージは、確かに支えになります。
サイズの合わない靴を無理やりはいて
歩幅を気にしながら歩くのをやめ、
はだしで芝生の上を駆け出せたときの心地よさに
似ているのではないかと思います。